

JAPAN URBAN DESIGN
INSTITUTE

都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷 2-35-10

本郷瀬川ビルテ113

TELEPHONE 03-3812-6664

FACSIMILE 03-3812-6828

JUDI NEWS

049 JULY 20.
1999

発行者
都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●第9期定例総会	1	17
●特集テーマ：「石の町」		20
1. 「過去からの贈り物」石の町、大谷	2	
2. 石とアート	6	
3. 石の里づくりを目指して	10	
4. 活力とふれあいをうむ石の都 ・真壁を目指して	14	20
●委員会活動報告		17
●事務局より		20
●編集後記		20

次の10年に向けて、さらなる活動の活性化を！

第9期定例総会

宮城 俊作

MIYAGI SYUNSAKU
代表幹事

千葉大学

■7月17日（土）、10:30～12:30、品川区天王洲アイル地区M1ビル25階会議室において第9期定例総会が開催された。出席者52名に、有効委任状193通を加えて総数245名の参加（定足数：176名）があった。

■第1号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長及びブロック幹事より第8期の活動及び収支報告があり、承認された。委員会活動では、都市環境デザインに関する各種セミナー、学生向けセミナー、自治体職員向け講習会、JUDIニュースの発行など外部への情報発信が継続されるとともに、都市環境デザインガイドブックの編集がすすめられ、情報発信のうえで主要な成果となっていることが報告された。また、地方のブロックにおいて地元の都市環境に関する問題に対する意見発表やブロック活動をまとめた冊子の出版、その全国会員への配布など社会的活動が活性化されたことが報告された。第8期収支報告については、収入・支出ともに予算額に対して実施額が減ったことが報告されるとともに、この収支報告が資料の通り相違ないことが監査役よ

り報告された。

■第2号議案では、総務担当代表幹事、各委員会委員長、各ブロック幹事より第9期活動計画及び予算計画の提案があり、承認された。第9期の活動方針としては、①本会の特色を活かした活動の充実、②対社会的な情報発信と交流の促進、③組織運営の改善、④財政基盤の強化、⑤10周年記念事業の具体的な準備作業、などが提案された。

■報告事項として、海外へ長期出張する天野光一代表幹事の役割を補佐するために、新たに伊藤登氏を代表幹事補佐とする旨の報告がなされ、了承された。

■自由討議では、10周年記念事業の企画案について提案がなされ、記念イベントのプログラムや開催時期、場所などについて討議された。具体的な企画案としては、①10周年記念のコンベンションの開催、②都市環境デザイン賞の創設、③JUDI NEWSの発展と拡充、④インターネットの導入と本格的な運用開始、などが提案された。また、総会後に記念事業準備委員会を発足させることによって具体的な作業に入ることが了承された。



定例総会の様子



活動報告をする代表幹事の伊藤洋氏

特集：石の町

1. 過去からの贈りもの

16年前、初めて大谷を訪ねた時、西洋のドオモやカテドラルで体感した石積文化の莊厳さとは違った、今迄体感したことのない、巨大な無の地下空間の底知れない波動を、全身に鳥肌が立った体験が今でも鮮明に蘇る。この感動的な出会いから、私と大谷との長い付き合いがはじまった。

採掘場跡は、誰もいない公演前のホールのような静けさと緊張感に加え、90%を超える高湿度から薄い霧が立ち込めており、神秘的で何かこれから始まる予感を抱かせる。大谷石に含まれるゼオライトと呼ばれる腐敗を防止する作用をもつ成分の効果によるためか10°C前後の冷たい坑内の空気を吸い込むと感性が研ぎ澄まされ覚醒する。

数10mもある壁面の石肌には、ツルハ

シによる細かい規則的なテクスチャーが全面に刻み込まれている。坑内の薄明りが、漂う霧とこの柔らかな人の手によるテクスチャーをとらえ、空間をより象徴的に浮かび上がらせている。大谷に点在する巨大な採掘場跡は、人を神秘の迷宮へと飲み込み、そして心地よくやさしくつつみ込む。

ところによっては、雨水が溜まり地底湖のような池が出来上がっており、高い天井からの差し込む自然光に照らされる世界は、さながら難解でありながらも美しい光と陰の交錯したゴタール映画のシーンを彷彿させる。

この総延長数10kmにも及ぶ目的をもたない無の巨大な地下空間は、訪れた人を魅了し、創造力をかきたて、それぞれの夢を増幅させる『未知なる過去からの贈り物』なのかもしれない。

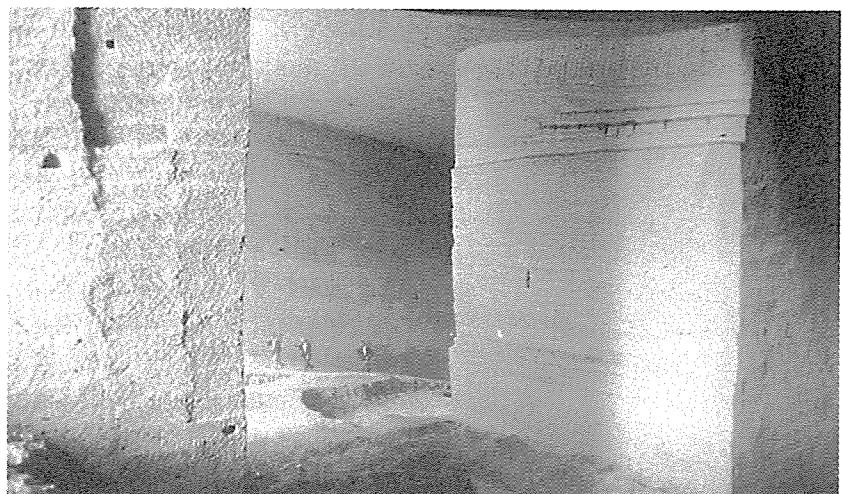


PHOTO 1 大谷石の採掘場跡。巨大な無の空間が広がっている。
中央の人物からそのスケールがうかがえる。

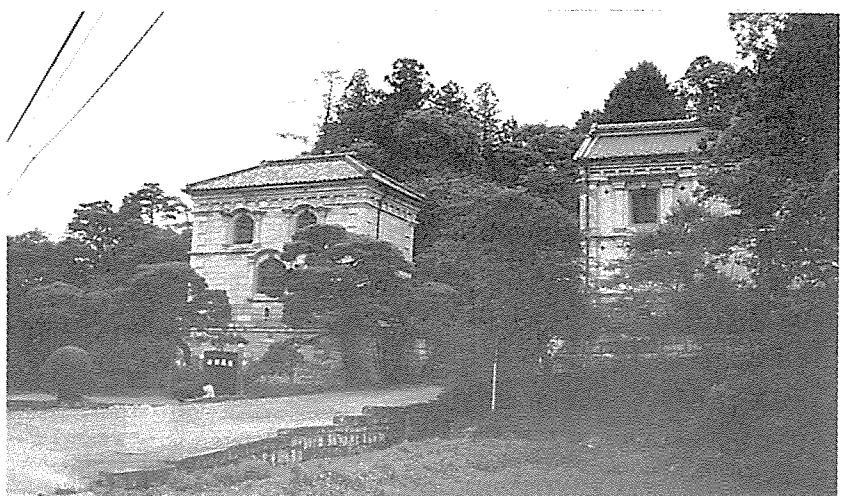


PHOTO 2 大谷石積の石倉と住宅。今も当時の石材業者の隆盛の記憶を残している。

「過去からの贈り物」
石の町、大谷

尾坂 昇治
OSAKA SHOJI
(株) シナジー

2. 石のまち大谷の沿革

1) 大谷石の歴史

栃木県宇都宮市の中心部から約7kmに位置する大谷は、石のまちとして古くから栄えてきた。この地域で採掘される「大谷石」とは今から約2,000万年前の新生代第3中世流紋岩質角礫凝灰岩の総称である。

大谷を中心に地下200m～300mの深さで東西に約8km、南北に37kmに分布しており、埋蔵量は10億トンと推定されている。大谷石は、見た目があたたかで石質が柔らかく加工が容易な凝灰岩の特質から、文献等により確認されている利用の歴史は古く、古墳時代までさかのぼる。奈良時代（741年頃）には、下野国分寺、国文尼寺の礎石。

平安時代（1063年頃）宇都宮氏初代の藤原宗円が宇都宮城築城に使用した。

江戸時代中期には、採掘が本格的に始められ、二荒山神社や、宇都宮鉤天井伝説で名高い宇都宮城にも利用された。

明治、大正、昭和初期まで大谷石は、石倉や石塀、礎石などでコンクリートブロックが登場するまでの間、全国で様々な用途に利用された。中でも、フランク・ロイド・ライト氏の設計による帝国ホテル（大正11年完成：現在は明治村に保存）は、大谷石の名を全国に広めた。大谷石のもつ柔らかな独特の風合いをうまく生かしたこの建築は、大谷石を用いた代表作品として今日でも高く評価されている。

昭和34年頃までは、ツルハシと背子による人力での手掘りを行っていた大谷石にも機械化の波が押し寄せた。

この石材業の機械化によって採石や加工での利便性は向上したものの、皮肉にも柔らかな大谷石の人的加工の優位性が崩れ始めた。

さらに、コンクリートブロックやセメントの普及と近代建築に適応した新しい建築基準法の出現によって、構造体としての大谷石は姿を消した。近年では、資材として薄くスライスでき、軽量化されている御影石やマーブルなどの輸入石材に押され、大谷石は、表面処理や熱加工をした新しい内装材や装飾品としての活用と外構部材としての利用にとどまっている。

最近では、イタリアから大理石の採掘に用いるワイヤー式のダイアモンドカッターの導入を試み、過去の最大寸法とされた人の背負える限界の約80～120kgの大きさの固まりの何10倍ものサイズでの採掘が可能となり、新たな活用の展開を期待する動きも出ている。

2) 大谷町のうつりかわり

まちの中央には姿川が流れ、810年弘法大師によって開かれたと伝えられる坂東三十三観音霊場19番札所が、「大谷寺」があるものの大谷の町は、古墳時代から石を切り出していた史実もあり、基本的には大谷石の石材業とともに自然発生した産業振興型のまちである。

記録では、江戸中期、すでに大谷の石材問屋は、16軒を数え、家持ち石工は、350名を超えており、400年続く石の町としての基盤はすでにこの時期に出来上がっていた。明治、大正時代には、採掘のツルハシなどの道具を作ったり、修理する鍛冶屋から衣料店、加工業、輸送業などの周辺事業も繁榮し、全国に名だたる石材拠

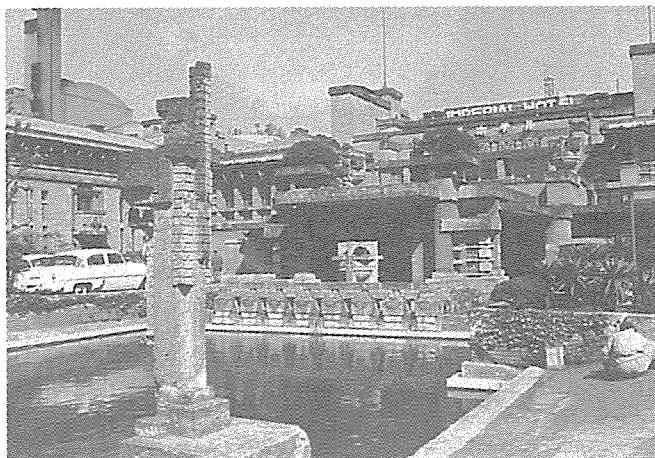


PHOTO 3 フランク・ロイド・ライト氏の設計による旧帝国ホテル。大谷石を効果的に活用している。現在は明治村に保存されている。

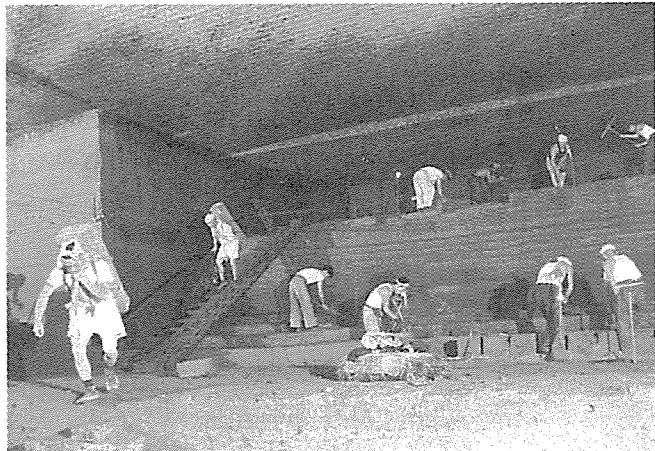


PHOTO 4 昭和初期の採石場の様子。ツルハシで大谷石を切り出し、80～120kgの固まりを背子で運搬している。こうした人力による生産が主であった。

点として戦前まで隆盛を極めた。戦後は、石材出荷の低迷から、「大谷寺」、「大谷平和記念観音」を目玉に観光のまちへと変化し、切り立った美しい岩肌がむき出しになつた特長的な景観性から「陸の松島」と呼ばれ多くの人がこの地へ来訪した。その後、昭和54年には、大谷の石材業の歴史と実際採石されていた巨大な採掘場を公開した「大谷資料館」も整備された。バブル景気にも後押しされ、平成元年落盤事故が起きるまでの間、大谷に点在する世界的にも希な地下巨大採掘場跡地への感心が高まり『未来へ向かう地下の街』として脚光を浴びた。

3. 石場採掘跡地の利用

かつては、大谷と言えば誰もが知る石の産地であった。石の需要が冷え込んだ現在まちにとっては、石よりも採石によって切り取られた、何百年も一般の人々の目に触れることのなかつた『未知なる空間』と呼ばれた地下採石場跡地の空間利用に対する期待の方が大きい。

採掘場跡には、「露天掘り」と「坑内堀り」の2つがある。中でも地下に何kmもつながる無数の「坑内堀り跡」は、一ヵ所でも広さ約20,000m²を超え、深さは30m（大谷資料館内の採石場）にも及び訪れる人を圧巻する。石肌には、手堀り時代のツルハシの掘削痕が幾重にも刻まれ、ずっしりとした年輪の重さと人の手による美しい陰影のテクスチャーで包み込まれている。坑によって多少の差はあるが、湿度は90%程度で気温は8℃～15℃程度で一定している。地下空間の形状は、10m

～20mのピッチで太い四角の石柱を残しながら採石を行うため、採掘してできあがった空間は、巨大な石柱をもつた建造物の内部空間のようなイメージを与える。坑内の天井高さは10mから高いものでは、60mを超えるものもある。この『未知なる空間』の利用については、大谷石の需要が冷え込んでからスタートしたため、40年の歴史からすれば比較的新しい。

昭和18年（1943年）陸軍の糧秣廠・被服廠の地下秘密倉庫から始まり、昭和20年には中島飛行機の地下軍需工場として軍事利用された。戦後は昭和44年から低温の自然倉庫として政府の米や農産物の保管倉庫として活用された。昭和54年に大谷資料館が開館し、一般の人々に地下採掘場跡が公開されてからは今までの常識を破る自由な発想からの活用がくり広げられることになった。

宇宙線の実験、生ハム工場、ホログラフ撮影場等の産業的活用をはじめにファッションショー、現代アート展覧会、コンサート、ダンス、山海塾公演等文化イベントが開催された。イベントの詳しい内容については、大谷資料館のホームページ <http://www.ask.ne.jp/~oya909/museum> を参照して頂きたい。

他にも私が関わった地下及び地上空間活用プロジェクトプランだけでも、地下人工スキー場、地下美術館、博物館、テーマパーク、地下ブリューワリー、レジャーセンター、温泉、照明センター、美術品倉庫、石材事業振興センター、産業廃棄物処理場、サッカー場、コンサートホール、スタジアム、ロックフラワーガーデン、観光セ



PHOTO 5 第二次世界大戦後に建立された「大谷平和観音」。大谷の観光スポットとして周辺整備が行われている。

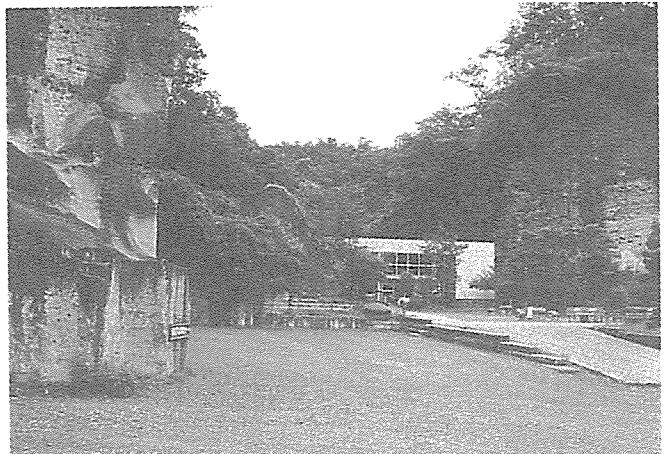


PHOTO 6 昭和54年に開館された「大谷資料館」。大谷の石材業の歴史と実際の巨大な地下採掘場を公開している。採掘場では、様々なカルチャーアイベントが開催されている。

ンター等数限りない構想が繰り広げられているもののまちづくりとしての実現化へはまだ道のりが遠い。

4. 「石のまちづくり」への取り組み

「石の町大谷」のまちづくりは、観光・文化・産業振興をテーマに、自治体／地元組合（石材組合、自治会等）／民間の3つの主体が連携して推進を行っている。大谷は、北関東で最大の観光スポットである日光にも程近く「日本ロマンチック街道」の南の起点にあたる。すぐ近くには年間130万人を誇る大型の市民農業公園「ロマンチック村」（第3セクター）も3年前にオープンし、広域での観光回遊ネットワークの創出をめざし、観光拠点化構想を策定している。

宇都宮市は、平成7年イタリアの「石の町」で知られるピエトラサンタ市と文化友好都市の締結を行い、人・文化・産業の交流を行っている。平成8年には、宇都宮市街の商店街の商店街のペイプメントをピエトラサンタ市の大理石とデザインで仕上げた。昨年も市民数十人が同市を訪れ、市民レベルでも交流を深めている。また、石の町にありがちな石の粉で薄汚れたイメージを払拭し、大谷らしさを創出するために、この地区の景観条例の検討を行っている。具体的な姿川の整備としては、改修工事や交流ポイントとなる景観公園や大谷石を用いた外構修景などの環境整備も徐々に実施されている。

中長期的な構想としては、大谷の風土と資産を生かしたロックフラワーガーデンや



PHOTO 7

「大谷資料館」で開催された滑川五郎氏による舞踏公演『アボリジニイ』。毎年、舞踏や現代アート等の文化イベントが繰り広げられている。

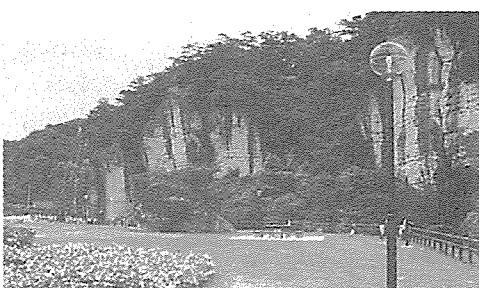


PHOTO 8

1987年に開催された山本寛斎氏によるファッションショー『行くぞッ！』。

PHOTO 9

1998年に姿川の大谷市民の家跡地に整備された交流公園。かつて「陸の松島」と呼ばれた大谷の特徴的な風景。ダイナミックな岩肌と松が美しい調和を見せていている。



地下ミュージアム、地下劇場アーティストインレジデンスや石の国際インフォメーションセンター等の計画が練られている。

5. 大谷の光と陰

多くの人々の夢と創造力を膨らませる採掘場跡だが、地上の土地所有権と採石権の立体的な交錯に加えて、古い地域のために公園にも混乱が見られ開発しにくい背景を負っている。民間事業を推進する上で資本のベースとなる土地の担保評価も採掘抗のために評価不能となり経済低迷期の現状では活性化へのマイナス要因となっている。地域にとっては、過去から送られたとてつもないこの地下空間資源が諸刃の剣となっている。大々的に全国報道された小さな陥没事故のイメージが活性化へのポジティブな考え方をネガティブに変えた。もちろん、現在使用されている採掘場跡や資料館は、十分な安全調査を行った上での活用と聞いている。陥没した場所は、古い時代に採石された空間の再利用を考えていない採石場であり、地元の人からすれば周知の事実であったのかも知れない。ただ、このショッキングな事件から世論は、埋戻し派と活用派の二極に分かれた。埋戻すにも莫大な費用を必要とするため、産業廃棄物の投棄場としての埋戻しが予測される。この場合は、処理場を整備し、新しい地域振興策として厳格なルールづくりと一つの新規事業に地域ぐるみで取り組む姿勢が不可欠となる。私も数々の大谷の採掘場跡を見たが、固体差が大きく、明らかに危険を感じるものもあるれば、少し手を加えるだけで安心して有効活用できるものが多くある。実際にには、天井を落として再利用するなど無理のない適材適所の活用が期待されるところだ。

数年前に実施されたヒヤリング調査からも地元の人々の活性化や文化の育成に対する意識はとても高く、各界で活躍している多くの大谷ファンも、この大谷で何かしらの夢を膨らませているのも事実である。

私が大谷に関わってからも何度も活性化への熱い波が起きては沈静化した。この波は約6～7年の周期で繰り返している。地域活性化の成功には一人のそれこそ石を通じて狂信的理念と行動力を持ったリーダーの出現と地域の結束力、行政のリード力、社会経済活力、これらの波長のタイミングがシンクロする事が必要となる。私自身もみんなの夢を乗せられる波が来るかどうか？楽しみにネクストウェーブの到来を見守っている。

（資料協力：宇都宮市大谷資料館）



写真1 庵治半島航空写真



位置図
N

東経 134度8分
北緯 34度23分

総面積 15.82 km²

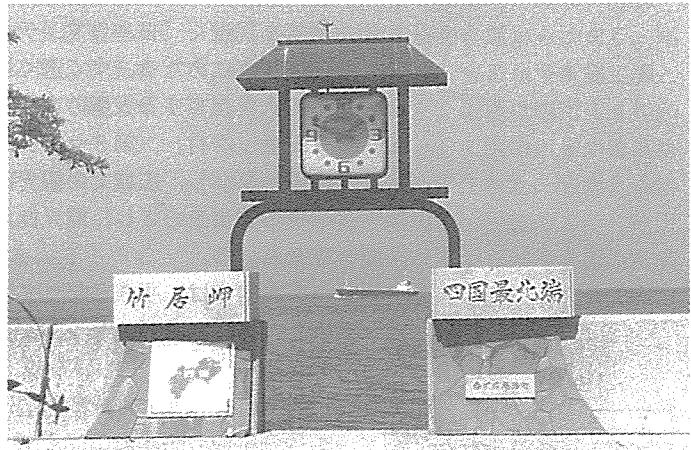


写真2

特集

2

石とアート

木村 武男
KIMURA TAKEO
庵治町役場企画課

1. 石のまちと庵治石

四国本島の最南端は太平洋に突き出た高知県足摺岬だということはよく知られています。では四国本島の最北端は何処か知っていますか？それは香川県のほぼ中央部で瀬戸内海に突き出た半島の町庵治町なのです。

南は五剣山の靈峰、庵治石の産地女体山をはさんで牟礼町に接し、三方を世界に珍しい海の公園と、その美をたたえられている瀬戸内海国立公園の穏やかな海に囲まれ、海を隔てて西には源平の古戦場の屋島が、北には豊島、小豆島、その向こうには本州岡山県の山並みが続く。東にはうっすらと淡路島が霞んで眺められる。

この庵治半島では昔から良質の石が採掘されており、銘石「庵治石」として全国的にその名が知られている。「庵治石」という名は旧高松藩の「御用石」という石切場があつた時代に、この良質の石の出る所が庵治の地域内にあつたから「庵治石」と呼ばれるようになった。

庵治石は花崗岩の中でもきめの細かな地肌を特徴としています。石質により細目（こまめ）、中目（ちゅうめ）、荒目（あらめ）に分けられ、細目は雲母、長石、石英の一つ一つが細かく、その小さい黒雲母の数が多いから磨くと青黒く、細かな紺がすりのような上品な肌になる。その上、最大の特徴に「斑（ふ）が浮く」という現象がある。これは指先で押さえて、湿り気、うるおいを与えたような、まだらな模様のあることで、石の全面

が二重のかすり摸様をみせるものです。長石、石英には種々の色があるため、よそには桜ミカゲといった淡紅色の石も出るが、庵治石ではそれが薄い青色になり、少量の白雲母が混ざっているので、銀粉を吹いたように輝きを見せるものもある。中目は黒雲母の粒がさらに小さく少ないので、細目よりは白く見える。

石英、長石、雲母などの結晶が小さく、その結合が緻密なために、他の花崗岩に比較して硬いことも特徴の一つである。ノミが立ちにくいくらい加工にも苦労したが、その反面、細かな、小さい部分にわたる彫刻も可能である。緻密だから磨けば磨くほど艶が出る。変色することも少ない。もともと石で塔などを造るのは、強くていつまでも変わらないからである。この点花崗岩は他の石に勝るが、中でも庵治石はこの点に優れている。

青黒く、紋様が細かく、磨けば艶がよく出るから、文字を刻んでも見やすくよく映る。そのため墓石として特に珍重され、近頃は90%までが墓や記念碑などとなっている。10%が灯籠やその他の彫刻材料となっているわけだが、価格が高く、その色も近代建築には必ずしもマッチしないということで、建築材料には余り使われていない。

花崗岩はそれを構成している石英や長石などの膨張率が違うので、結晶の間に隙間ができやすい。長い年月の間には風化されて各

部が離れて崩れてくる。庵治石の場合は結晶の各部が小さく、従って膨張や変動も少ないので、目の粗い他の花崗岩よりも風化には強いが、それでも大火の後などには角がはじけ割れるなど比較的火に弱いということが欠点といえば欠点である。

2. 採石

庵治石の産地は、庵治町と牟礼町の町境、五剣山から西に走る尾根の北側が庵治、南側が牟礼で、尾根が西に広がった辺りが中心地となっている。採石場を丁場といい今でも

「大丁場」、「中丁場」などの地名で呼ばれている。

大丁場付近は良質の細目が多く、その一ヶ所でも、見上げると高い岩肌で、大きな石のすり鉢の底に居る感じである。20メートルほどの上の段には右と左に丁場があり、目の前に底を見せて丁場とそれぞれつながり合い、競争で石を崩している。底では唸りを上げて動き回るブルドーザーやダンプカー、その頭上を上の段で切り出された石がワイヤー製のハンモックに吊るされて横切つて下りる。中丁場も同様で、100メートル近い崖の右中段に崩したばかりの石がごろごろ、そのすぐ下はまた別の丁場という状況である。

採石は岩盤の割れ目、岩の傷を見定めるところから始まる。庵治の丁場には「南北にかさね傷」「東西に二番傷」と言われる筋が通っている。この筋に沿って2、30センチ間隔に火薬を詰めるための穴を掘る。深さは7、8メートルだが圧搾空気を使った削岩機を使うのでわけはない。火薬が使われ始めたのは明治30年頃だが、この穴は昭和33年頃

まで鉄棒とハンマーの手掘りであった。最近はジェットエンジンと同じ原理の軽油バーナーで、岩盤を焼切る機械も使われるようになって、能率は格段に向上された。

3. 石の加工と芸術

加工場では石を必要な長さ大きさに切ること、思い通りの平面や曲面を作り出すこと、その平面、曲面を磨くこと、石に穴を掘ることなど自由自在に出来なければならぬ。一打ち一打ち打ち次ぎ、打ち飛ばせる石は1リ、2リの小片であったりする。無理はきかず、偶然やまぐれ当たりをねがうことは危険であった。ノミの方向を変えて、ノミを打つ回数を多くするほど良い物になった。だから石屋さんは誰もよく働いた。朝早くフイゴで火を起こし、ノミを焼きトッテンカンと大小のノミの先を細く鍛えた。相手が硬い庵治石だからノミの先もすぐ丸く太くなつた。

お地蔵さんや動物などの姿物を造る職人は、一作二作と造るごとに芸術家に成長していく。石の相手に鉄を手にして、ただ自分と語り合いながら根気よく石を削る。石の形を活かし、肌を活かして、有名無名の逸品佳作ができ上がった。大鳥居や五重の塔などの大作にも、小さい細かい部分をうまく打ち整えた繊細な仕事にも、芸術性と共に技術的な工夫努力があり苦しみも喜びもあったようだ。

庵治石の美しさはよく知られ、その細工物にも逸品があり、名人上手と言われる人もあるが、それらの多くは型に入った伝統の中での作品であった。美術工芸一般に新風が吹き、世界の美術界に大躍進があつても、石の作品には進歩や向上は少なかつた。この庵治石の工芸に現代美術の光を投げかけ、新しい道を開いてくれたのが彫刻家流政之氏であった。



写真3 採石場

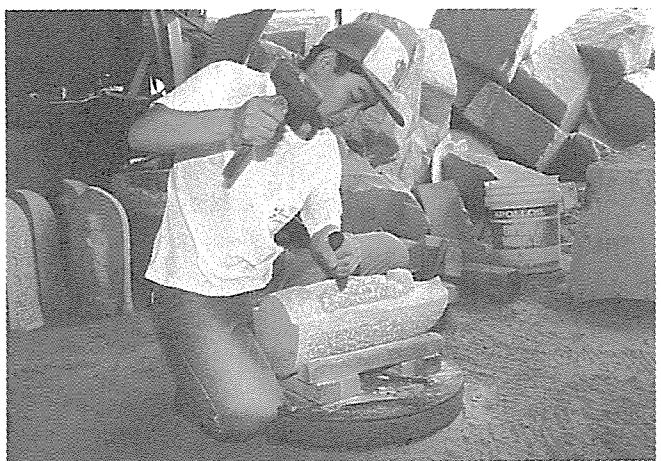


写真4 石工

昭和30年頃、庵治町の岡田石材工業(株)の工場内に小さな小屋をアトリエとして流氏は仕事をするようになった。石工の技術を絶やさぬよう。その技術の中から生まれる線や面、そこに見られる力や動きなどにも注目させ、当時の香川県知事金子氏の熱望もあって、昭和37年、青年を集めての庵治石匠塾となつた。

38年には、ニューヨーク世界博覧会の日本館の石彫が、アメリカ人に注目され世界に有名になると、流氏に従って渡米し、その製作に参加させてもらった若い石匠たちは、新しい石の造形の真価にふれ、ますますその技術を磨いた。と同時に庵治・牟礼の心ある石材加工業者の眼を開いた。40年頃から庵治町東海岸の鞍谷の丘に、「石と煉瓦のとりで」とも言われる建物が造られここが製作の本拠となつた。

また、彫刻家イサム・ノグチ氏も昭和38年ユネスコ本部庭石選定のためこの庵治石の産地をたずね、庵治石とその風土が気に入り、丸亀市にあった入江家旧宅が牟礼町五剣山麓に移築されると、昭和45年春この中に製作のためのスタジオを造っている。これが後のイサム・ノグチ庭園美術館となってい

4. 石のさとは芸術の町

昭和30・40年代の石材業界は毎日成長した時代であった。40年代には石の需要が多くなり加工業者は庵治石の確保に懸命だった。細目の庵治石を採石業者に注文しても何ヵ月も先でないと手に入らなくなつた。このころより国内産の石はもとより韓国、ボ

ルトガル、スエーデン、アフリカ、インド、ブラジルなど世界各国からの輸入石材が増加した。輸入石材は品薄でドンドン高くなる庵治石に比べ大きく、ドル安と相俟つて安価になつたため需要は急激に増加した。庵治石の高級感がますます高まる一方で、庵治石も限りある資源であることに目が向けられるようになった。将来、庵治石が枯渇して、庵治石の産地で無くなるということは石材業界にとって大きなイメージダウンであり、石材業が町の主産業である庵治町・牟礼町にとっても石材業界の活性化が大きな課題となる。

1988年(昭和63年)、四国と本州が巨大橋で結ばれ四国が陸続きとなり新しい時代の幕開けとなった。

この年、瀬戸大橋開通の記念事業として庵治町・牟礼町は地域の芸術文化の向上と地元石材業の発展に資することの上に、自然と芸術の調和、彫刻のあるまちづくりを目指して

「石の彫刻コンクール」と「石の彫刻国際シンポジウム」の2本立てからなる「第1回石のさとフェスティバル」を開催した。

このころ、新しい都市美作りに関連して、野外彫刻コンクールや彫刻シンポジウムを行うことが盛んになる傾向をみせていた頃であったがコンクールとかシンポジウムなどを行うのは県とか市など比較的財政力の大きな団体が主催していたようで、庵治町・牟礼町のような小さな町がコンクールとシンポジウムを同時開催するということはまさに画期的なことであった。しかもシンポジウムにおいては世界の著名な彫刻家を招待しての「国際シンポジウム」ということで、



写真5 町のメイン通りには石彫作品が並ぶ

(緑道公園)

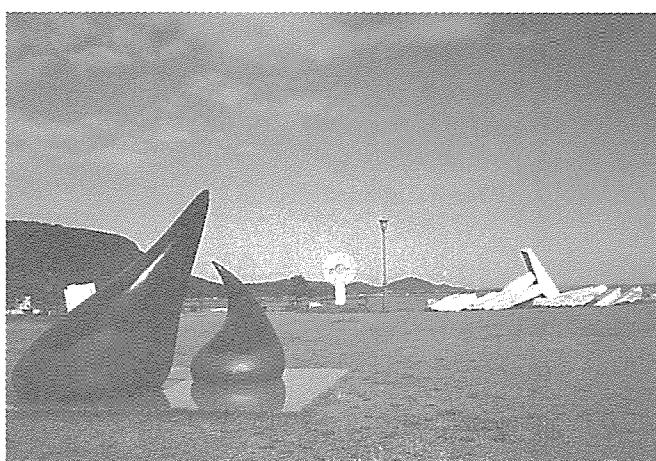


写真6 瀬戸内海の自然に溶け込む石彫作品

しろはな
(城岬公園)

両町にとって超大型イベントとなった。

美しい自然を舞台に、近代設備を誇る工場群と世界一の石工技術集団をもつ石のさとならではの、芸術と地域とが一体となって取り組まれた。

「石の彫刻コンクール」では全国各地から総数101点の作品の応募を得た。この中には彫刻芸術という分野に新たな創造意欲をかきたてられた庵治町・牟礼町の若き彫刻家からも多数の参加があったことは言うまでもありません。

また、「石の庭園国際シンポジウム」においてはフランス、アルゼンチン、韓国の外国彫刻家をはじめ招待作家が1ヶ月間庵治町・牟礼町に滞在して制作に取り組まれた。この間地元企業は制作サポートを通じて異国の造形文化を肌で感じ取ると共に庵治・牟礼の石彫技術と設備の優秀さを証明したシンポジウムとなった。

この「石のさとフェスティバル」は庵治町

と牟礼町とが、3年に一度互いに会場を移しながら開催を続けてきました。第4回目については1997年の国民文化祭としての開催になりましたが、来る2000年には「第5回石のさとフェスティバル」を開催する予定となっています。フェスティバルで制作された大型彫刻作品は既に両町合わせて46点にもなり、町のあちらこちらに展示され自然とうまく調和し、芸術の香りを醸し出している。

四国最北端の庵治半島では国際的な石の芸術文化が華咲いています。

「石のさと庵治へ一遍おいであせ！」

【参考文献】

庵治町教育委員会「庵治町史」「庵治石の歴史」
庵治町・牟礼町

「石のさとフェスティバル」図録



写真7 石彫作品

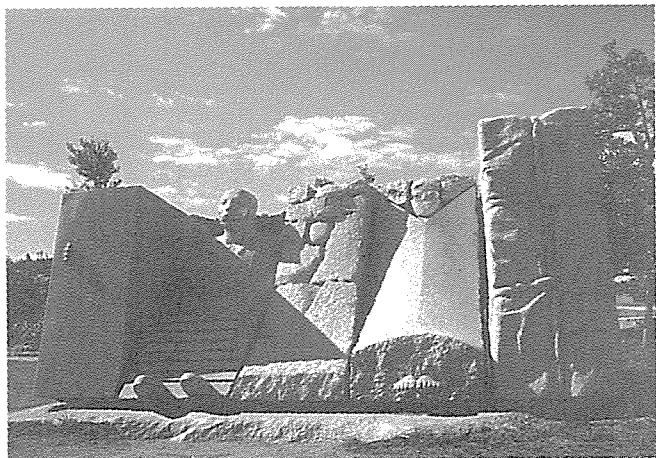


写真8 石彫作品

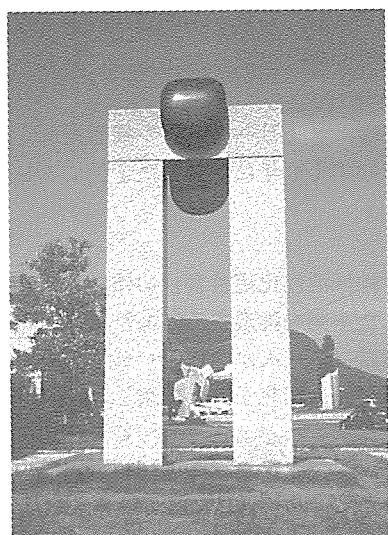


写真9 石彫作品

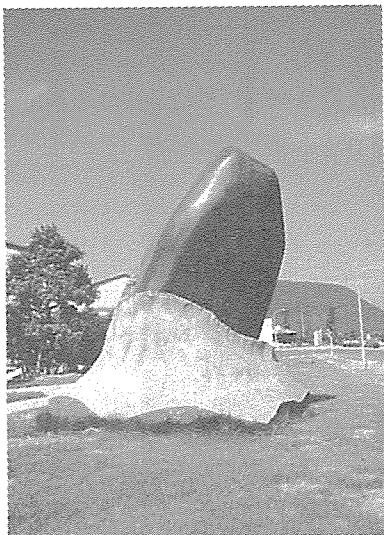


写真10 石彫作品



写真11 石彫作品

石の里づくりを 目指して

林 幸彦

HAYASHI YUKIHIKO
蛭川村商工会

1. 蛭川村の紹介

蛭川村は、岐阜県東南部にあって、三方をニツ森山脈と笠置山につながる山々に囲まれ南は丘陵状をなし、恵那市に広がる盆地で人口4,000人余りの自然豊かな村です。村の南半分の地質が花崗岩であり日本でも有数の埋蔵量を誇り、他の産地と比較しても採掘しやすい条件を備えています。この村の石の特徴は、白みかげとさびみかげが产出される事で、こうした「石」を使った地場産業を中心に産業は成り立っています。

2. 事業を実施した動機、きっかけ

全国各地で、地域活性化の動きが盛んになってきた昭和61年、蛭川村の特色である「石」を全面的に活用しようと、また、民間の事業所による石の博物館「博石館」が完成され、「石」を見直すきっかけが出来たことです。



写真1 昭和61年制作・石看板



写真2 博石館前・オブジェロード

3. 事業の推進状況

「石を使った継続事業」

石の村をアピールするために蛭川村の玄関口「恵那峡」に、石を利用した看板を設置し、シンボルにすることになりました。

看板のテーマは、小・中学生から募集し、「元気か地球人」と命名され、以後商工会青年部の呼びかけになっています。

この年より、毎年石を利用した事業を開しております。

62年度・石の看板・石の公園づくり

63年度・石のTELBOXの設置（2ヶ所）
地域活性化提言書（石に火がついた）
の作成

元年度・イルミネーション事業（3ヶ所）

2年度・第2弾地域活性化提言書（元気か蛭川人）の作成

3年度・オブジェロード石張り作業、石と木のバス停（1ヶ所）

「男はつらいよ」第44作寅次郎の告白
・蛭川ロケ

石彫のつどい開始、以後今年まで継続

4年度・バス停にみかげ石敷設、蛭川村
デザイン会議

第2弾・バス停の設置（1ヶ所）

5年度「21世紀の蛭川村」イラスト作
成

蛭川ロケ記念「寅さんファミリー記念
碑の設置」

6年度 メモリーストーン構想推進ひる
かわストーンデザインコンテスト

7年度 ひるかわ石製「石の街路灯」
4本設置

8年度 メモリーストーン構想推進
(石畳構想・全国に募集)

9年度 メモリーストーン構想推進・蛭
川村で9年に生まれた子供にプレゼン
ト

10年度 メモリーストーン構想推進・
蛭川村で10年に生まれた子供にプレゼ
ント

①. 「地域活性化提言書」の作成

こうした事業を推進するにあたり、昭和63年度は「石に火がついた」のタイトルで、蛭川村将来構想をまとめました。「魅力ある住みたくなるような村づくり」をテーマに「石の村の推進」「人づくり構想」「蛭川村にロマン帝国を再現しよう」の3つの骨子で作成しました。

平成2年度には、第2弾蛭川村将来構想を「元気か地球人・元気か蛭川人」のタイ

トルでまとめ上げました。これは、「医療福祉」「道路・交通」「産業」「観光」等、具体的な項目について現状分析と将来構想を試みた提言書です。行政とのタイアップをもくろんでこの提言書を村に提出しました。

のことにより今後の青年部活動の柱が出来ました。

②. 「男はつらいよ」撮影の成功

「村のきねふり祭りを全国へ売り込むには、寅さん映画の人気にあやかるのが一番」と決議しその後、青年部員が毎日毎日、山田洋次監督へ手紙を書きラブコールを送りました。約50通ほど出した2ヶ月後、監督から「皆さんの熱意と村を思う気持ちには大いに感動した。いつか祭りを見に行きます」と待望の返事が届き、平成2年4月には、スタッフが祭りや、恵那峡を下見に訪れました。そして、ついに平成3年11月に第44作「寅次郎の告白」の場面に、蛭川村を撮影したいとの連絡がありました。決定から撮影までわずか2週間足らずという短い期間でしたが、青年部を中心に実行委員会を組織し、それこそ寝食を忘れて、撮影準備に取り掛かりました。撮影日は12月4日、5日の2日間、村民総出演で大成功でした。この事業で青年部にはやれば出来ると言う自信と、部員同志の結束が計られました。

その後も、松竹関係者とは交流があり、寅さんの記念碑を設置する準備として、平成5年大船撮影所へ出向き「男はつらいよ」の撮影現場で寅さんファミリーの手形・サインをもらい記念碑の設置になりました。

③. 「石彫のつどい」

「石の文化」を育てることに関して、石が産出されるという絶好の条件を持つ村です。産出される石の加工をする途中でできる、製品にはならない端材、価値として認められない捨てである石を利用して、石の彫刻作品を作ろうと計画し始まったのが、石彫のつどいで今年で9回目を迎えます。

全国のプロ彫刻家や、アマチュア作家など20数名の参加を得て、毎年8月の暑い陽射しの中、年ごとに盛大になり開催しております。

現在までに完成された作品は100点を超え、村の芸術村づくり構想とあいまって、そのうち75点余りが村内のオブジェロード（石畳の歩道）、公共施設（役場、小・中学校）、ポケットパーク等に設置さ



写真3 平成6年12月制作
「男はつらいよ」蛭川ロケ記念・碑



写真4 メモリーストーン事業
手形足形設置風景

れています。参加された作家は、1~8回までに194名になりました。

この事業はプロ、アマ問わずだれでも参加でき、プロといって特別扱いをするではなく、すべて平等にアトリエのテント張りから会場の設営まで全員で行ない、また作品の所有権は作家の物にする事が特徴です。

蛭川村の石材業は、平成3年工業統計調査では、63億の売上がありましたが、平成9年では50億と大きく落ち込んでおります。大きな要因は、外材の流入、製品価格の低下、需要の停滞と、非常に厳しい環境にあり、このまま手をこまねいていては、石材業の発展は見込まれません。

この石彫のつどいを続けていくことにより、新しい感性を持った芸術家たちに、触れることで、村内の石材業者も刺激をうけ、新鮮な感覚で石材業を見つめ直すことができ、ひいては、新しい製品も生まれてくると考えております。

新しい石の文化の芽も生まれつつあります。対外的にも、他市町村からの彫刻作品発注、各地からのオブジェの問い合わせ、芸術家たちの口コミで蛭川村の存在感など、じょじょにではありますが、反響はでてきております。平成9年には、パブリックアート・フォーラム四日市全国シンポジウムが開催され、「地域の産業とパブリックアート」の分科会で発表する機会が与えられ、石彫のつどい事業をPRして来ました。

蛭川村では、石材業の元気の良さが、すべての産業に影響するほどのウエートを占めているため、この業界をさらに活性化さ

せようと、今後も『石彫のつどい』を継続していくことが必要と考えています。

私たちは、石の文化の発展は石材業界、引いては蛭川村の発展にかならず繋がるものと確信をしております。

④ ストーンデザインコンテスト

石材作品の付加価値を高め販路を拡大する、優れたデザインを公共施設に、生かし村の文化の向上に役立てるの2点を狙いに、石製の生活用品や公共構造物の「住環境デザイン」と「街路灯デザイン」の2部門を設け、全国に募集しました。

応募作品は村の石材業者にファイル化して配布し、デザインや商品化の参考にしてもらい、「街路灯部門」の優秀作品は、作品化して村内に設置しています。

⑤ メモリーストーン構想

この事業は、平成4年度より計画をし平成7年度より始めました。「あなたもたった1枚の石畳のふるさとが持てます」というキャッチフレーズでチラシを9,000枚印刷をし全国募集をしております。

内容は、ひるかわ御影石（30cm×30cm）の、板石に手形、足形を彫刻しオブジェロード（石畳の歩道）に張り付けていくもので、石代、加工費、施工費等で20,000円が必要です。

これまでのよう、青年部の手弁当の奉仕作業も労力、資金面で限界があり、村の知名度アップ、都市との接点をあわせ考えて企画しました。

現在では、100枚程の手形が張り付いております。「石は永遠に残るものであります。」子供、老夫婦、結婚記念に手形を残していただき、何十年か先に蛭川村に見に来てほしいと思っています。



写真5 石彫のつどい制作風景



写真6 石彫のつどい制作風景



写真7 石彫のつどい制作風景

ひるかわアートマップ



4. 今後

蛭川村には素晴らしいアイデア・行動力・リーダーシップの取れる魅力いっぱいの人材がたくさんいます。「出来る出来、ヤル気があれば何んでも出来る」を合意言葉にこれまで事業を進めてきました。

部員の減少・リーダーの養成と難問もかかえておりますが、先輩たちの残してくれたレールに乗って今後も地域のために頑張るつもりです。



写真8 第1回石彫のつどい
上別府 志郎 作「トルソー光と影」

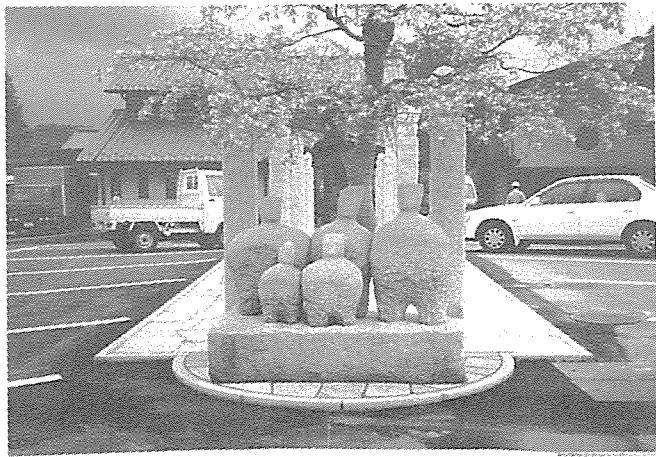


写真9 第4回石彫のつどい
尾崎 慎 作「和’94」



写真10 第4回石彫のつどい
和泉 俊昭 作
「1994時の階段(15)THE STEP(15)」



写真11 第4回石彫のつどい
中田 弘 作「風のみち」

活力とふれあい をうむ石の都・ 真壁をめざして

関 憲市
SEKI KENICHI
茨城県真壁町役場商工課

1. 真壁町の概要

① ふれあい拠点・真壁

本町は、茨城県の中西部、筑波山の西側に位置し、県都水戸より西に45km、首都東京からは70km圏内にあります。東側を筑波山（876m）加波山（709m）足尾山（628m）など筑波山系の山並みを境として八郷町と、西側は観音川を隔てて協和町、明野町と、南側は研究学園都市つくば市と、北側は大和村と接しています。

また、北関東の中核都市である栃木県宇都宮市からも40km圏内にあり、筑波研究学園都市、県都水戸市、栃木県宇都宮市（テクノポリス）から形成される北関東の発展を先導するトライアングルの中に位置しています。

本町は、緑豊かな自然環境に加え、北関東自動車道、首都圏中央連絡自動車道、学園テクノロード、広域道路体系整備の進展とあいまって、首都圏外縁環状、北関東発展トライアングルの触れ合い交流拠点と位置付けられようとしています。

② 緑豊かな田園都市・真壁

本町は、東西約9km総面積63.40平方kmの広がりを持ち、地形的には東～南部一帯の筑波山系により形成された山地と町域のほぼ中央部を南下する桜川沿いの低地及び北西部一帯の台地に大別されます。このうち山地の裾部は中央の低地へ向けて、山麓地から台地へとなだらかに変化しています。

気候は関東内陸型気候に属し年間平均気温は14℃前後ですがつくば山の中腹に気温の逆転現象による特殊な少気候域があり、温州みかんの北限地となっています。

また、山地から山麓部一帯は、アカマツやスギ、ヒノキの植樹林が優占し、一部ではアカマツ・ヤマツツジ群落の分布がみられます。さらに、北西部の台地は、アカマツ植樹林やクヌギ・コナラ群落が点在しています。

このような自然は、緑豊かな田園風景や紅葉に色づいた山々など四季折々の美しさを醸し出しており、次代に残すべき町民共有の貴重な財産であるとともに、町内外の人々に交流・レクリエーションの場を提供するものあります。

③ 歴史の町・真壁

本町は、800余年前に、真壁氏の城下町として開かれた歴史の古い町です。真壁の地名については、5世紀に置かれた名代

写真 1



写真 2



写真 3



写真 4 歴史の町・真壁

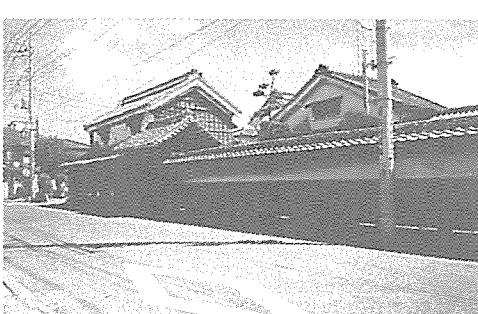


写真 5 歴史の町・真壁

(なしろ) の白髪部 (しらかべ) に由来し、のちに白壁さらに真壁になったといわれています。

平安時代末期にこの地に入部した多気長幹 (たけたけもと) が真壁氏を名のり、172年に真壁城を築きました。

以来、真壁氏は、430年もの間この地を治めてきましたが、関ヶ原の戦いの時豊臣側の佐竹氏 (さたけし) に仕えていたため、1602年佐竹氏とともに秋田県の角館へ国替えとなりました。その後、真壁城には浅野長重が慶長16年 (1611年) に入り元和8年 (1622年) に廃藩となり笠間領を中心に旗本・幕府領に分割されました。

このように800余年にわたって城下町として整備されてきた町内には、名所・旧跡が多く、別名「少京都」にふさわしい、しっとりとした歴史を感じさせる町のたたずまいを持っています。

また、明治維新の時には、自由民権運動の高まりの中で時の政府に反旗を翻し、自由党員16名が加波山で決起した加波山事件が起こりました。

現在加波山頂には、事件を記す旗立て石が建てられており、自由民権運動の激しかった往時をしのばせています。

④ 石の都・真壁

本町は、加波山を中心に、きめの細かい美しい光沢を放つ、良質の花崗岩が産出され石材業が栄えています。

本町の石の採掘の歴史は遠く豊臣時代にまでさかのぼるといわれています。明治中期からは、火薬を使った本格的な採掘が行われるようになり、東京の代表的な石造建築の材料供給地となりました。

現在では墓石の利用が最も多く、灯籠の製品はほぼ全国に出荷されています。



写真6 石の都・真壁

また、町内いたるところに、町のシンボルにもなっている石灯籠や大小の彫刻、墓石を置いた石材店が多くみられ、さらに近年では外国産原石・加工品の輸入が進められるなど石を通じた国際交流もみられます。

このように、本町は「石の都」といえます。

2. 石材業の推移と現状

真壁町の東側にある加波山から本格的に御影石が採掘されたのは明治になってからであるが、当時は専ら建築材として用いられました。東京赤坂の迎賓館や日本橋の三越本店等、日本を代表する建造物に使用され、その評価は極めて高いものがありました。

一方で墓石や灯籠などの石材製品も手がけ、戦後はこちらの方がウエイトが高くなり、特に墓石は首都圏という大消費地をかかえていた事や昭和30年代後半にダイヤモンド歯の切断機の開発と共に飛躍的な伸びをみました。

その発展のほどは、石材業者の激増ぶりが端的に物語っています。戦前50社ほどだった石材業者は、昭和30年頃には約100社に増え昭和50年には300社を突破し、その後も増え続け、昭和60年には450社を数え、平成に入ると約500社に達しています。売上高で示せば、昭和50年当時で90億円だったのが平成に入るとき約500億円に達する勢いで発展してきました。

しかし近年の落ち込みは深刻です。景気の低迷で墓石自体の需要が減少していることや、従業者の高齢化等原因はさまざまですが最大の原因は安価な輸入原石の急増に

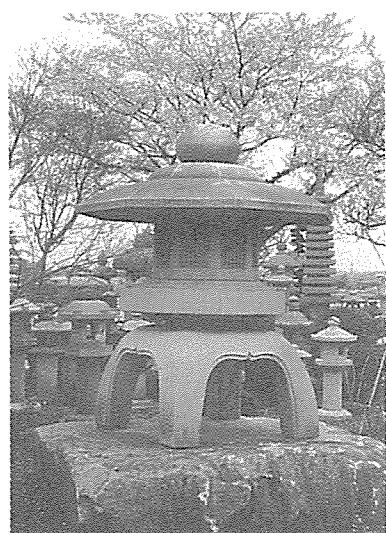


写真7 石灯籠

よります。当町も石の産地であるとはいっても採掘に関わる業者はごくわずかで、多くの業者は原石を仕入れて加工する加工業者であります。1980年代に韓国から、その後中国から原石が日本に輸入され始めました。価格の低廉な輸入原石が全国的に広がりを見せ価格競争が激化すると、真壁の石材業者も原石を輸入しての外材の加工業者と変化するように輸入しての外材の加工業者と変化するようになって来ました。現在真壁で加工されている原石の70~80%が外国産であり、他にもインドやポルトガル、アフリカ等の国々からも原石が輸入されています。

90年代に入るとさらに追い討ちをかけるように、中国の石材事業者は日本から技術を導入し、原石だけでなく加工済みの完成品、あるいは半完成品を輸入するようになります。頼みの綱の加工業までが脅かされる状況が生まれてきています。

こうした現状にさらされ、当町の石材産業はピーク時の平成3年当時500億円から現在250億円程度へと大幅に減少し、しかもさらに落ち込むと危惧されています。

石屋がくしゃみをすれば真壁町は風邪をひくと言われているだけに、地元経済に対する影響は深刻で町ぐるみで取り組む振興策が求められています。

3. 石材業の振興

当町の石材業は地域経游の中核産業としてばかりでなく、社会、文化などあらゆる面で地域社会と深く関わりながら、発展してきたところであります。

しかしながらバブル経済崩壊後の需要の不振に加え、海外からの安価な石材製品の急激な流入増大などにより当町の石材業は極めて大きな影響を受けております。

消費者ニーズの高度化・多様化・情報化・技術革新などの進展により、当町の石材業がさらに成長、発展を遂げていくた

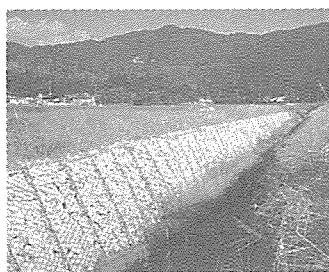


写真8 かごマット



写真9 石まつり



写真10 日本一の石のまち

め、中国製品に負けないために技術力の向上や人材の育成などにより、新分野への進出や、製品の高付加価値化に向けた新たな活動を積極的に展開していくことが必要となります。

町では、平成7年に、真壁石灯籠が国の伝統的工芸品に指定され、平成8年度から平成12年度までの5ヶ年間に渡って、国補助事業である「伝統的工芸品産業の振興事業」に基づき、①後継者育成②需要開拓③新商品開発の事業を展開中であります。さらに石燈籠関係では当町の観光地でもある「つくし湖」近く県道沿いに常設展示場を設置したのをはじめ県内の伝統的工芸品に指定されている『笠間焼』『結城紬』の関係2市並びに県と連携を図り、各産地組合の単体での事業展開はさることながら3品目が一体となった県内外への販路拡大や新たな市場の開拓を目指しています。

また、つくし湖ではやはり石材業の盛んな隣村の大和村と共同で11月上旬に「真壁・大和の石まつり」が開催され、墓石・燈籠・新開発石製品の展示即売会や石製品コンクール・石うすでの餅つき大会等各種イベントが開かれ今では地元はもちろん、周辺市町村から多くの人が訪れるなど地域の秋の祭典として定着しつつあります。

一方、石材の採掘と製造加工の両段階で排出される石材廃棄物の処理は今、最も大きな課題であります。

石材の端材、いわゆるコッパ石と呼ばれる廃材の有効活用について、石材協同組合では国、県の補助を受け1997年度事業として「活路開拓ビジョン調査事業」に乗り出し、茨城大学工学部とも共同して検討を重ねた結果、河川の景観や生態系の保持、水質浄化の点で従来、蛇かごといわれた、石詰めのかごを用いる護岸工法に注目してこれに石材廃材を利用し「かごマット」として販売し河川改修の護岸工事をはじめ、水生植物を繁茂させやすい環境を再生する工法を提供し町の河川の護岸工事に用いられ、それらが宣伝効果となり周辺の自治体にも広がっている。

今後は、平成10年9月28日に承認された茨城県筑波西部地域に係る特定中小企業集積活性化計画に基づく筑波西部地区4市町村（笠間市・岩瀬町・真壁町・大和村）が連携をとりながら石材業者が作成する各分野への進出計画をその自主性と創意を尊重しつつ支援し円滑な事業が出来るよう努め活性化計画が大きな力となり厳しい状況を乗り越えられるよう努めたい。

■研修研究委員会 報告

松本 篤
MATSUMOTO ATSUSHI
研修研究委員
アトリエ ホル

●第4回都市環境デザインセミナー

田村明氏「都市環境デザインの明日」を語る

昨年（平成10年）12月5日に、地域プランナーの田村明氏をむかえ、第4回都市環境デザインセミナーが横浜山下公園、氷川丸のイベントホールで開催された。

冒頭、都市環境デザイン会議（JUDI）研究研修委員会委員長の岸井隆幸氏より、JUDIの案内に続き今回のセミナーの趣旨として、これまで3回の建築家を招いてのセミナーに変わり、今回は行政の立場からアーバンデザインに深く関わられた方にお話を伺うという意向が述べられた。以下に田村氏の講演と、引き続き行われたディスカッションの内容を要約する。

田村氏の講演

1. 環境デザインとの出会い

田村氏はまず自らの経歴を述べられる中で環境デザインにいかに関わってこられたかを話された。大学を卒業され、運輸省を経て民間企業に進まれた頃は、所得倍増計画にそった地域計画が盛んになった時期でもある。地域プランナーを目指された氏は、このような職業の嚆矢として浅田孝氏が昭和36年に設立された環境開発センターに参加された。横浜市は当時米軍による市街地の接收の後、基盤整備事業や人口急増への対応が求められており、市の依頼を受けた環境開発センターではその街づくり計画の立案に取りかかった。この中で氏は横浜の戦略的都市計画や事業とともに、IDやストリートファニチュアのような細部までも視野に入れたアーバンデザインを提案された。

2. 自治体の主体性と計画の総合性

その後昭和43年に市の企画調整室に入られた田村氏は、市の骨格に関わる6大事業を中心に総合的な街づくりを推進された。また宅地開発要綱の制定や緑の保全をはじめ、都市の景観を美しくするという当時としては先進的な観点も含めての高速道路の都心部ルート変更、緑の軸線構想の実現、商店街整備などに取り組まれた。そして10年余りに及ぶ活動によりMM21計画など現在の横浜のまちづくりの基礎を築かれた。このようなプロジェクトは氏にとっては、アーバンデザインに行政として取り組まれた最初の仕事であり、個別化しがちな都市計画に総合性を回復させ得ることを実践的に示された。こうした事例から、限られた権限の中で主体性を軸に計画の総合性を実現することについて、自治体という組織はすぐれた可能性、有効性を持つ単位であることを強調された。

3. 環境全体のデザインシステムについて

昭和40年代、アーバンデザインはまだ一般的ではなかったが、建築メディアでは海外の事例を取り上げはじめていた。田村氏は建築家の楨氏らと協同し金沢臨海地区に実践的なアーバンデザインの展開を始めた。また地下鉄の計画では車両のデザインやID的なことも含めて民間のデザイナーを起用する中で、個々のデザインの質にこだわりながらも環境全体としてどういうデザインシステムの展開が望ましいのかを模索された。外人墓地を中心とする山手地区では港を眺望する地区に増え始めた開発計画をコントロールする必要から、景観に優れた地点を景観ポイントとして景観全体に位置付ける手法を考案し、景観保全要綱を整備された。都心臨海部では近代的な再開発計画と明治文化を象徴する赤レンガのドックや倉庫とを共存させることで固有性のある景観の実現を目指された。こうした事例から氏は、個々のデザインを環境全体の中に位置づけるシステムを構築することの重要性を述べられた。

4. 環境デザインの中で新しい行政の役割

以上の事例に見られるように、民間の個別の計画では環境の総合性に配慮することは難しいが一方、行政サイドからは環境全体を把握し有効な手立てをこうじることが可能である。行政固有のこうした機能をもっと重視すべきである。そして今後行政に求められるのは市民の主体性に支えられた新しい行政－市民行政であって決して従来の行政－縦割り・お上行政ではないことを強調された。最後に、行政に関わる個人レベルの向上は著しいが、システムとしての行政は相変わらずの問題をかかえるところが多いことを危惧して話を締め括られた。

ディスカッション

休憩後、都市環境デザイン研究所の土田旭氏がコメンテーター、日本大学岸井隆幸氏が出席者の質問を取りまとめる形で、以下の話題を中心に三者のディスカッションが行われた。

1. アーバンデザインという言葉について

土田氏が60年代に最初にアーバンデザインに触れたのは丹下健三氏の東京計画1960に代表されるような、建築家からの都市スケールへの提言であった。こうした中で60～70年代に横浜で独自の景観行政を立ちあげられた氏が考えるアーバンデザインについてコメントが求められた。

田村氏は、アーバンデザインに求められることはスケールの大きさではなく、IDのようにきめの細かい物まで見通した一貫

した姿勢であり、そうした理念にそって横断的な企画調整室を立ちあげた。従来の階層的なしきみの中で景観行政を進めるのではなく、主体性を軸に環境の個性化を求めて創意工夫を図っていくことがアーバンデザインに必要であると述べられた。

2. 地方分権について

景観の個性化実現のための工夫と地方分権とは関連があるかとの質問に対し、田村氏は、地方分権を二種類に分けられた上で、必要なのは、本部の意向を受けて業務を進める機関委任事務的な分権ではなく、例えば美の価値観が一般的でないような時代に、景観、デザインを行政に取り込んで実践できるような主体性を持った分権であると述べられた。

3. 市民参加と意思決定について

近年の市民参加、ワークショップ型によるまちづくりに対して、権力を行使しない都市デザインはあり得ないという意見も一方にはあるがこの兼ね合いについて氏の意見が求められた。

田村氏は、合意形成のプロセスは計画によって異なる。横浜でも市民の合意を得た、市民への提案という形をとっているが、例えばディテールに対する専門家の役割があるようにすべてが市民参加というわけには

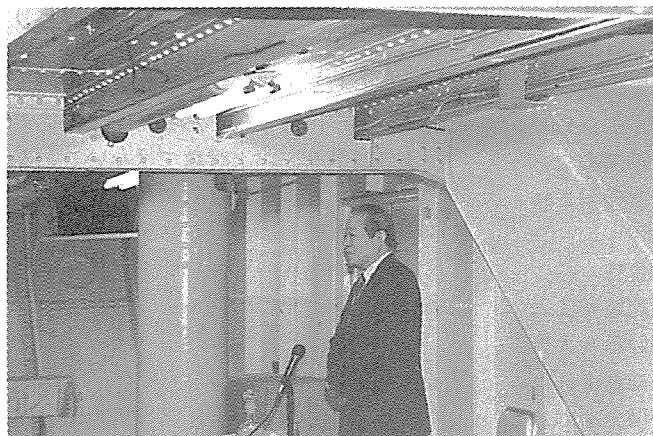
いかない。むしろこれらだけじめを演出し、仕組みを作り物事を進めていくプロデューサーとしての資質を備えることが行政の重要な役割である。一方でデザイナーは総合的な視野を養い、関係性を理解する訓練をしなければならないと述べられた。

4. 景観行政の現状について

プロデューサー的資質に優れた人物がいて、現在の低成長時代にも総合的な景観行政を進めている自治体の事例はあるかとの質疑に対しては、町村レベルには優れた人物が確かにいる。特定の自治体をあげることはできないが、景観行政に対してのレベルは向上したことは確かである。問題は横並び状態から一歩先へ踏み出す勇気が少なくなってきたことではないかと述べられた。

5. 結び

最後に補足として22世紀論に話が進んだ。田村氏は、市民、自治、個性などがキーワードになるであろう21世紀を超えて、22世紀に思いをはせることも意味はあるだろう。22世紀はグローバル化した地域の意味が大きくなり国家が曖昧になるなかで個人のつながりがより求められるようになるだろう。例えばアートや宗教の役割が増すかもしれない」と結ばれた。



田村明氏の講演。氷川丸の当時の様子をうかがわせる6番ハッチホールで行われた。



田村明氏の講演



セミナー後半のディスカッションの様子



ディスカッションは出席者の質疑を交えながら行われた。

■事業委員会報告

●7月17日JUDIの事業委員会開催イベントの報告

中野 恒明

NAKANO TSUNEAKI

事業委員長

㈱アブル総合計画事務所

1) パネルディスカッション「地方分権への
胎動と地方都市の都市デザインの潮流」

13:30~15:30 M IビルABC会議室

都市環境デザインガイドブックに携わつ
てきた地方ブロックの編集委員を主体に、
進行役に谷明彦（北陸ブロック）、パネラ
ーとして柳田良造（北海道ブロック）、丸
茂弘幸（関西ブロック）、山崎洋二（東北
ブロック）、大久保裕文（九州ブロック）
を迎える、各ブロックの編集過程に浮かび上
がってきた、様々な都市の姿、問題などを、
スライドとともに解説していただいた。各
パネラーの説明が一巡り、二巡りしたあと
会場との意見交換を経て予定時間をオーバー
する盛況ぶりであったことを報告します。

なお、ガイドブックの成果は、雑誌「造
景」のこの秋から24回の連載となり、関西
ブロックの「奈良」が第1号となる予定。

(担当：南條、西沢)

2) 都市環境デザインモニターメッセ

15:45~19:00 M IビルABC会議室

総会時の恒例のイベントとして定着した
モニターメッセは昨年と同様に、OHPと
説明を主体のプレゼンテーション形式とし、
新規技術等発表枠20分が5社、レビュー枠の
15分が8社、計13社の発表をモニターしま
した。昨年の厳しい状況下にも関わらず多數
の申し込みを受け、時間枠の割り振りなど
工面し、結果として慌ただしい時間の送り
となってしまった感がありましたが、どう
にか予定の事業収入を確保しました。モニ
ターとなられた会員各位のご協力ありがとうございます。

来年はもう少しプレゼン内容の確認、発表
の絞り込みを行うことも検討します。

(担当：井上、中野)

3) 懇親会

19:10~20:30 第一ホテル・シーフォー
ト/トップオブザベイ

会員とモニターメッセ参加企業の方々約
100名の参加で、例年と同様、懇親の場を持
ちました。

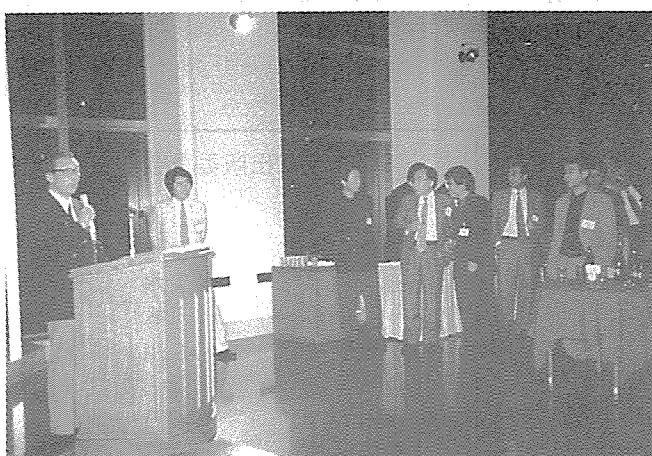
(担当：井上、中野)



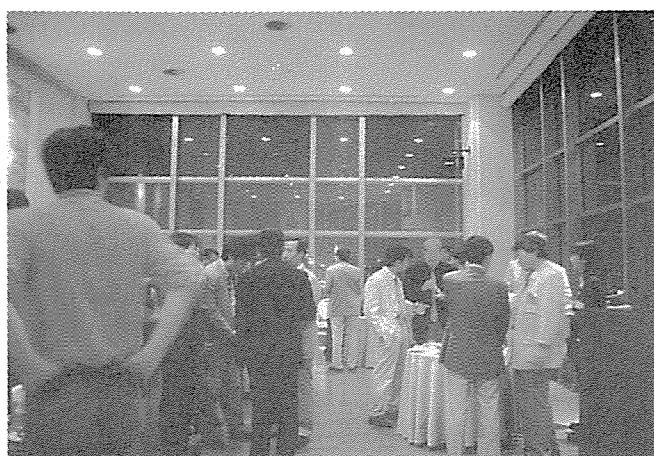
第2回JUDIパネルディスカッションにおける会場とパネリストの活発な意見交換



都市環境デザインモニターの様子



懇親会の挨拶に立つ代表幹事の高橋志保彦氏



懇親会の様子

事務局より

1. 新会員の紹介

1999年5月1日～6月30日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

6月30日現在の会員数は、528名です。

氏名	勤務先
石田 聖次	(有) ライトシーン
川俣 雅秋	(株) 栃木都市計画センター
久保 光弘	(株) 久保都市計画事務所
相澤 幸寛	(株) 大林組
外園 勝	(有) SOTO設景室

2. 退会者（1999年5月～6月）

小倉善明、小澤靖一、木村健一郎、清水文美子、中地正隆、長山勝英、福沢健次、藤原肇、由井大介（敬称略）

3. 住所変更等（敬称略）

氏名	変更内容(新)
尾崎 真理	㈱オズカラースタジオ 〒141-0021 品川区上大崎3-3-9-623 Tel. 03-5449-9503 Fax 03-5449-9504
上井 正之	㈱オリエンタルコンサルタンツ 〒213-0011 川崎市高津区久本3-5-7 Tel. 044-812-8325 Fax 044-812-8324
島 博司	(有)集環境計画 〒770-0923 徳島市大道1-51 Tel. 088-656-2097 Fax 088-655-0875
中野 恒明	㈱アブル総合計画事務所 〒113-0034 文京区湯島4-2-1杏林ビル Tel. 03-3816-5831 Fax 03-3816-4249

編集後記

6月末に神戸に仕事で出かけた後、四国の高松まで足を延ばしイサム・ノグチ庭園美術館を訪りました。

予約制で人数制限をしている事と、その日の最後の見学者ということで一人で夕刻の庭園美術館を巡りました。

山麓の縁に囲まれた所に江戸期の古い民家を移築して住居とし、作品の陳列場、作業場として大小二つの古い蔵が配置され、その周りに石垣で半円形に囲まれた広場で多数の石の彫刻がある屋外展示物となつて、特別な緊張感のある空間であった。イサムの墓は、裏山にあり、大胆で荒く削った大振りの石を積み上げた石段を登り、おだやかな形状の芝生の丘の上に、庵治石の丸い自然石が一つ置かれていた。

そこからの景色は正面に雄大な屋島がそびえ、右手には遠く瀬戸内海を眺めるスパラシイ景観でした。

1人の芸術家を受け入れ、支えてきた和泉さん始め、近隣の人々、そこを文化の発信地として、新しい彫刻のシンボルロードや公園を造り、単に石を売る町でなく産業を文化的事業として町づくりをする牟礼の町を心地よく歩きました。

（中嶋 猛夫）

氏名	変更内容(新)
松井 雅彦	㈱横浜みなとみらい21 〒220-0012 横浜市西区みなとみらい2-3-5 Tel. 045-682-0021 Fax 045-682-4400
山田 伸次	日本工営㈱地域計画部 〒102-0083 千代田区麹町5-4
吉田 洋	㈱森俊偉+ARCO建築・計画事務所 〒921-8151 金沢市窪7-364-401 Tel. 076-242-2743 Fax 076-242-2930
吉野 国夫	㈱ダン計画研究所 〒540-0021 大阪市中央区大手通1-2-10-704 Tel. 06-6944-1173 Fax 06-6946-9120

4. 1999年度会員名簿について

今回の名簿より、経歴・職歴、公職、作品等を表記する欄を設け、また会員間でも既に多く利用されている電子メールのアドレスも記載することとしました。

空欄の方は、経歴・職歴、公職、作品等とメールアドレスの原稿をお送り下さい。経歴・職歴、公職、作品等の欄は、1行22文字で10行までとなりますので、文字数・行数は厳守して下さい。規定の文字数を越える場合は削除させていただきます。

原稿の送り先は下記へお願いいたします。
都市環境デザイン会議事務局 〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-10 本郷瀬川ビル FAX 03-3812-6828 E-mail judi@japan.email.ne.jp

今回の特集は「石の町」でした。4つのまちの取り組みにはそれぞれ工夫や努力が感じられ、心を打たれました。中でも私にとって最もなじみが深いのは何度も足を運んだ岐阜県の蛭川村です。最初に訪問したのはもう12年も前のこと、博石館の岩本哲臣さんの石への思いと村づくりにかける情熱には圧倒されるばかりでした。蛭川村は若者たちの結束で元気になった村です。他のまちも同じように熱意やアイデアを持った人が核となって活動されているようですね。低迷している地場産業を持つまちに何らかのヒントになれば幸いです。

（松村 みち子）

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	清水 泰博
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 憲悟
作山 康	